

まったく当時の朝鮮人は、虫ケラ同然、と言って悪ければ、牛馬同然のあつかいをされていました。

そういう時代に、「李」家の息子が、名門校の北野中学に入り、卒業したというのは、これは大変な出来事だといえます。

何しろ、ふつりの日本人の子弟でもむづかしいといわれていた名門校です。そこを「李」家の息子が卒業したとすれば、この息子は秀才中の秀才だったと思わねばなりません。そして「李」家は、同じ朝鮮人でも、子弟の教育に熱心で、それだけの力もあった上流の家柄で、かつ裕福な家庭だったと想像してもいいのではないでしょうか。

さて、こう書いてくると、どうしても「白面の才子」のイメージですが、残念ながら私が知ったとき、「李」家の息子はもう三十七、八のおっさんでした。

本田おやじは「李」家の兄弟の中で、その顔つきや、体つきに、いかにも朝鮮人らしい特長を最も多く持っていました。

おでこが広く、頭はいわゆる絶壁型、一重まぶたの目がつり上り、頬骨がとがり、背骨がまっすぐ、というより、うしろにそりかえっていて、

いや、朝鮮人らしい顔つきや、体つきが「白面の才子

」らしくないというのではありません。

弟に似て、やせて、色も黒い方ですが、この人の場合は、陽やけに酒やけを重ねて赤黒いのでした。

「李」家の人たち（つづき）

本田おやじには酒乱の癖があります。

酒が好きで、酒なしではいられない人でした。アル中の気配さえありました。飲めば、誰かれなしにからむのです。

たとえばこんな話があります。
ある夏の夕方です。

一人の男が飯場の前を通りかかりました。近くに住む工員さんです。松本組には、恩もうらみも、何の關係もない人です。

運悪く、そこに本田おやじがいたのです。晩しゃくのあと、涼みに出ていたのです。

「オイ、待て、待たんかいワレ」

と呼びとめられて、その人、立ち止まりました。

「何でウチの前を通るんや」

何で——と言われたって、天下の公道なのです。用があるが、なかりが、ここを通るのに何のさしつかえ

もあろう筈がありません。

それを「何で」と言われたのです。とっさに返事に困りました。目を白黒させていると無理無体な言葉がまたとんできました。

「ことわりなしにこの道を通るな、ボケッ」

なのです。

あきれて物がいえない、とはこのことです。

あきれて、その次には腹が立ったことでしょう。しかし、人の好い工員さんは、言い返すことが出来ません。

場所も、相手も悪いと思ったのでしょう。

酔っぱらいを相手に、ムキになるのも大人気ないし、さりとて、知らぬ顔で通りすぎようにも、袖をつかんで放しません。

何の、こんなガリガリのやせっほち、チョイと一突きでひっくり返る、と思っても、うっかり手を出せば、そこは土方飯場のまん前です。威勢のいいニイちゃんたちが飛び出して来て袋だたきにされるかもしれません。

進退ここにきわまって立往生です。

そこに通りかかったのが平山おやじです。すぐ、何が起っているのか察しました。

「兄キ、何してんねん」

平山が本田を取りおさえ、目頭で合図して、ほりほり

の体で、工員さんはその場を立ちさりました。

こんなことが、しばしばです。

素面のときは、まことに好人物です。頭もいいし、仕事もよく出来るし、申し分がないのです。

そりゃア、土方の親分です。一つの飯場をもった、いわば一国一城の主です。仕事にきびしいことは松本親方以上で、ニラミもきくのです。

それでいて、コマワリは気前よく切ってくれます。少ししんどの仕事には、分増しもつけてくれます。

「本田おやじの方が、松本おやじより話がわかる」

と若い衆は口をそろえていいます。

それが、一滴、酒が入ると、コロリと人が変わるのです。見さかいなしにからむのです。

現場ではニコニコしていた人が、飯場では、目がすわって、赤鬼のような形相になります。そのため、若い衆たちと取っ組み合いになることさえあります。

ここにも子供が二男一女ありましたが、そのおさない子供たちをつれて、ヨメさんが飯場の外の暗がりて息をひそめている光景を何度も見ました。

酒乱の夫の乱暴にたまりかねて、逃げだしたものの、行く所がなく、そうして夫の静まるのをまつてゐるのです。何とも、ものがなしい風景でした。

そんな具合ですから、本田飯場には若い衆がいつま

せん。

しまいは、一人もいなくなりました。

それでも親方の実兄です。世話役として現場に出ていました。酒くせは少しもよくなりません。むしろ悪くなる一方です。

「仕事のだんどりなら本田おやじ」

「松本おやじより頭がいい」

「何といっても北野中学出身」
それに

「仕事の鬼」

とまで言われた人が、何となく影がうすくなってきました。現場で若い衆たちに見せる笑顔にさえ、気の弱りが感じられるのです。そして、昼がそうであればあるほど、夜の酒乱に輪がかけられるのです。

もしかしたら、自分の人生に大きな不満をもっていたのかもしれない。

北野中卒の学歴は彼にとってのホコリでもあったでしょう。才能にも自信があったことでしょう。土方

の親方や、世話役では満足できなかったでしょう。

それが、四十近くなって気がついたら、弟に使われてゐるのです。おまけに自分の飯場は、彼自身の酒乱のためにつぶれてしまったのです。

「似た者夫婦」

という言葉があります。

それと逆に

「性格が反対な方が仲がよい」

とも、よく言われます。

どちらかといえば、神経質で短気だった本田おやじと、おっとり型の本田姐さんとはどうだったのでしょうか。ふつうなら、離婚ということにもなりかねない酒乱を、ふんわりとのれんに腕おし、柳に風、と受け流してしまひ姐さんの、あまりの手ごたえのなさ、さすがの本田おやじも少々参っていたのかもしれない。

そこで次には、もっと暴れてみる。しかし、やっぱり又かに釘・意地になってその次は更に酒乱をエスカレートさせる。そんなこともあったかもしれません。

どういう育ち方をしたのか、実に不思議な人でした。

この人の美点は、そのおっとりとした人柄でしたが、欠点もまたそれでした。

よく言えばおっとり、物にこだわらぬのんびりした性格ですが、悪く言えば、ぐずで、だらしがいいのです。

本田姐さんはピンシャラと着かざるのが好きでした。平山姐さんは動き者で、いつもキリッとした服装をしていました。

さぞ、やりきれなかったろう、と、これは私の勝手な想像ですが、当らずとも遠からずではないでしょう。そのやりきれなさを話す相手はいません。自分の中にたまる一方です。そして酒を飲むと、そのやりきれなさが、酒乱という形になって表に出て来たのではないのでしょうか。

本田姐さん（と私たちは呼んでいましたが）は、その夫とは何から何まで逆でした。

背も高く、ふっくらと大柄な、一口でいえばおデブさんの体つきも、本田おやじと正反対でした。

そして、性格までがおっとりとしています。TVタレントの京塚昌子を思い出してもらえば、口で説明するより早わかりです。

夫の酒乱をさけて、暗がりには子供たちをかかえ、ひっそりとうすくまっていた彼女の姿を何度も見たと書きましたが、そのものがなしい光景を、ただ一つすくったのは、彼女のユーモラスなまでに肥った体つきでした。

言葉つきまでもっちりして、朝鮮なまりがありました。それが、偉く人に齒がゆいくらいののんびりして見え

ました。
生活の苦勞も、夫の酒乱も、この人をやつれさせることは出来ないようでした。

本田姐さんは、どことなくしまりがいい服装をしていました。折目がなく、だらりとしてみえるのです。

そうしてこの人、家事はあまり上手ではないようでした。そんなことをしましたことにはむかない性格なのでしょう。無とん着な性分なのです。

「流して洗たくをするんや」

と、ある男がいました。本田おやじの飯場を逃げた男です。

「米を研いだり、菜っ葉を洗ったりする所でやで、赤ん坊のおしめを洗うんや。たまるかいな」

朝鮮人はあれだから困る、と、その男はいました。朝鮮人は誰でもそのなかの私は知りません。一つの例を全体にひろげるのも私の好みではありません。

現に、平山姐さんは一度だってそんなことをしたことはありません。

しかし、その男は、他にもそういう例があると主張していました。

それはともかく、私だってそんな場面を目撃したら一日もいたたまれなかつただろうと思います。

本田姐さんに言わせれば、きれいに洗って使えば大丈夫、それにせまい一つの空間を、いくつもの使い方をする方が合理的、ということになるのでしょうか。

そうかもしれませんが、私などには、とてもとても、
ついて行けません。

あるいは、本田おやじは、そういう姐さんに、じれっ
たい、歯がゆい思いをつのらせ、かねて自分の人生に感
じているやりきれなさを、更に更に深めていたのかもしれ
ません。「李」家は上流的家庭ではなかったのかと、
前に私の推理を書きました。それが当たっているとすれば、
名家の長男に生まれ、大阪で名門といわれた学校を出た
彼の、その生まれや青春の明るさと比べて、今の暗い酒
乱の意味がわかる気がします、どんなものでしょう。

その「李」家の本拠は西宮市の、ヤブノ建設から遠く
ない所にあったと前に書きました。

その自宅に行ったことがあります。

これまで、私が書いたことから読者は宏荘な邸宅を想
像するでしょうか。少くとも、小ざれいな一戸建の住宅
を想像するでしょうか。私は何となく小ざれいな家を想
像していたのです。

何百人もの土工を使い親方、何となく上流家庭を思わ
せる本田おやじの学歴、そしてピンシラした外出着で
奥さま然とした松本姐ご、それらを重ねあわせると、し
ょう々な住宅を想像するのが願望でしょう。

ところがそこは、スラムとしか呼びようがないような

一角一角でした。

バラック——と言っては、たしかに言いすぎですが、
古ぼけて、もう立っているのがやっとなといった家が寄り
そりにして、かたまっていました。

どれか一軒が倒れると、他の家もボシャッてしまいそ
うな、だからお互いに肩をよせあっていたいなければ——
そんな感じでした。

そこにはまだ高校生だった「李」家の末弟も住んでい
た筈です。二人の兄には似ず、色が白く、足が長く、い
かにも現代っ子といった好男子でした。

そのとき私は、バタ角か何か、現場で不足の材料をと
りに行ったのです。だから正確には「李」家の本宅に行
ったのではなく、その近くまで行ったのでした。

松本の自宅がどこか、はつきりとは判りませんでした。
ただその一角の中のどれかだと知っただけです。

しかし、それで十分です。その中のどの一軒をとって
も変りばえはしないのです。

そこで私は戦前から戦後へかけての、在日朝鮮人の生
活というものを考えました。

今、思いついたことを急いで書けば、「李」家の長男、
つまり本田おやじの出身校は北野中学と、耳にタコがで
きるほど聞かされましたが、弟たちの出身校については

一度も聞きませんでした。

松本おやじはたしかに旧制中学卒でなし、足の長い好
男子の末弟も高校出です。だが、出身校の名は聞きませ
ん。おそらく北野ほどの名門校ではなかったからでしょ
う。

だとすると、「李」家の兄弟の中で、長男だけが、飛
び抜けた秀才だったのでしょうか。それは思えません。
松本おやじも、末弟も、頭の良い人でした。

ならば、長男のときには名門校へ行かせることが出来
たけれど、次男以下の中には、もうそれだけの力が「
李」家にはなかったのだということになりました。

残念ながら、この兄弟の両親について、私は何も知り
ません。ただ、あれこれと想像をたくましくするばかり
です。

さて、ここまで書いて与えられた紙数がつとてしま
いました。まだまだ書きたいことはたくさんあります。こ
こまででも半分以下というところです。

しかし、八木節の文句じゃないけれど、
「下手で長いのは御座のじ、まじ」
です。

あとはまた次号に、というふうにいたします。

おわび

この号の原稿は、すべて私の責任ということ
だったのですが、いろいろ個人的な事情がかさ
なって、原稿の出来あがりがおくれてしま
いました。

「渡世」はいつでるのか、一体、やる気がある
のか、と編集部に読者からのお叱りがたくさん
きているそうです。

この号が、こんなにおくれたのは、すべて私
のせいです。心からおわびいたします。

(巻)